

「幻氷」

成田  
信恵

\* 人物表

亜紀

海の家  
の女主人

漁師  
A

漁師  
B

真冬の強風と、流水の流れついている  
静かな海の音。断崖に一人の女が立っ  
ている。

亜紀「ここが、日本最果ての宗谷岬…」

風の音。

亜紀「ここなら流水が見渡せる…すごい景色。  
落ちたらまず助からないわね」

風の音。

亜紀「冷たいだろうな…。いえ、きつと一瞬  
よ。これで最期なもの。それくらい耐え  
なきゃ。…5、4、3、2、1」

風の音に混じって何度も「3、2、  
1」とつぶやいている。

亜紀「…：ムリ！ やっぱり怖い！ どうし  
てこんな簡単なことができないの！ 日  
も暮れてきたし、どうしよう…」

風の中にかすかな風鈴の音が聞こえて  
くる。

亜紀「こんな季節に風鈴の音？ あ、あんな  
ところに明かりが…」

強風の中で薄く積もった雪の上を歩く  
音。風鈴の音が次第に大きくなってい  
く。

亜紀「海の家…「終点」？ 泳ぐところもな  
いのに？ まさか…開いてるわけ、ない  
わよね」

引き戸がガタンと開く音。

亜紀「開いた！ (ゲホゲホ) すごい…、  
ほこりっぽい」

奥から戸が開く音。

女「誰だい」

亜紀「キャッ」  
女「なんだい、あんた。よくここがみつけれ  
たね」

亜紀「すみません。明かりが見えたので。で  
もどうしてこんなところに海の家がある  
んですか？」

女「そんなにおかしいかい」

亜紀「だって岬でしょ。しかも、こんな真冬  
にお店を開けてるなんて」

女「ふーん、まあ、そんなことはどうでもい  
いさ。せっかく来たんだ。何か買って  
かい」

亜紀「あ…、えーと、数珠…。数珠なんてあ  
りますか？」

女「数珠？ ハハハ、普通、店に数珠なんて  
おいてるわけないさね」

亜紀「(慌てて) そ、そうですよね。…すみ  
ません」

女「いや、あるさ、うちはなーんでも置いて  
ある。だが、あんたのその様子じゃ、数  
珠よりロープとおもりのの方が良さそうだ  
がね？」

亜紀「え？」

女「それとも大きな漬物石でも腹にくくりつ  
けてやろうか。クッククッククック」

亜紀「どういう意味ですか。私がまるで…」  
女「いいか。真冬に、こんな場所に来る人間  
にはふたとおりいるんだよ。生きようと  
している人間と、死のうとしている人間  
だ。あんたはどうやら後者のようだね。  
どうだい、凶星だろう」

亜紀「…」

女「(ため息) そこじゃ寒いだろう。奥に来  
て座ったらどうだ。まあ、話でも聞いて  
やろうじゃないか」

亜紀「いえ、結構です。もう失礼します」

女「(奥から) ほら、早く入んな！」  
亜紀「(つぶやき) へんな人…」

外では風が吹きすすんでいる。

囲炉裏で火を焚いている音。  
戸がガタガタ鳴る。

女「さて、それじゃああなたの身の上話から始めようか」

亜紀「ちよつと待って！ おばあさんの方がおかしいわ。だいたいなんなの？ 岬に海の家って！」

女「そんなこと言われても、あたしや、ここにはもう何十年もいるんだよ」

亜紀「ほんと？ 宗谷岬に来た知り合いはたくさんいるけど、こんな場所に海の家があるなんて聞いたこともないわ」

女「そうかい。ともかくあるんだ。それでいいじゃないか。ところであなた、名前は何？」

亜紀「…亜紀です」

女「どこから来た」

亜紀「札幌ですけど」

女「で？」

亜紀「で、つて…」

女「なんで死にたくなつた。どうせ、くだらん理由だろう。男にふられたとか、借金つくつて首が回らなくなつたとか」

亜紀「そ、そんなの、おばあさんに関係ないじゃない！」

女「あーあ…。どうして今の若者は、命を粗末にしようと思うのかね。昔は生きたくても生きられない人がたくさんいたというのに…」

亜紀「おばあさんは、ずっと一人でここにいろの？」

女「そうだよ、かれこれ60年か」

亜紀「…さびしくないの？」

女「そりやさびしいさ。だから、あんたみたいな若い人が時々訪ねてくると嬉しくて、ついつい長話になっちゃうんだよ」

亜紀「そうだったの」

女「それよりさ、あんた、どうして数珠なんか欲しいと思つたんだい」

亜紀「うん…、子供がね、死んじゃつたの」

女「おや、まあ」

亜紀「3ヶ月前に、交通事故で…」

女「そうかい。そりや、辛かつたねえ」

亜紀「私のせいなの。目を離れたちよつとの隙に、道路に飛び出して…。あれから毎日、泣いて泣いて、泣きはらしたわ。でも…（グスグス）」

女「そうか…。それで死のうと思つたわけだ」

亜紀「結婚して4年目で、ようやく授かつた子だったの。あれほど大事に育ててきたのに。もちろん、主人も許してくれなかつたわ。もう私には生きる希望もない。だから…、だから、死んであの子に会つて、謝りたかつたの！」

女「バカだね。子供のために数珠を持って飛び込もうと思つたのか。あんな冷たい氷の海に。どうせ、死んだつて会えっこないよ。自殺は行く場所が違うんだ。そんなこともわからないのかい！」

亜紀「でも…私…」

囲炉裏に火をくべる。パチパチと火の音。外では風が吹いている。

女「あんた、えーと、亜紀ちゃんだっけ？ 他に行くところは？ ご両親はどうしてのさ」

亜紀「知らない。私、施設で育つたから。5歳ぐらいの時に、母親に捨てられたの。気付いたら札幌の施設にいたわ」

女「…そりや、とんでもない母親もいるもんだね」

亜紀「母親の記憶なんてほとんどないわ。だけど、昔、母親と流水が見えるところに住んでいたのだけは憶えているの。よく一緒に、流水が流れてくるのを海岸で見つたわ」

女「だから死に場所に、流水が見える場所を選んだつてわけか」

亜紀「…おかしいわよね、あれほど憎いと思いつけてきたのに。人生の最後には、どこにいるのかもわからない母親の近くで死にたいなんて」

女「それが人間の情つてもんだ。あんただつてホントはこう思つてるんだろ。捨てたのは何かの事情があつたに違いない。母親は、今でも自分を気にかけてくれてるつて」

亜紀「まさか！ 今頃は新しい男と仲良くなつていろわ。私が邪魔だつたのよ！ ど

うせ私なんて…(泣く)」

女「そんなことないよ。親が子供を嫌いなわけじゃないじゃないか」

亜紀「(泣く)…この辺で私の死体でもあがれば、母親も自分の子供だってわかるかもしれない。昔、子供を捨てたことを後悔するかもしれないと思って…」

女「よしよし、頑張って生きてきたんだねえ」

亜紀「(ヒックヒック)」

戸のガタガタ揺れる音。風の音。流水の鳴る音、ギギギ。

亜紀「おばあさん、私…」

女「しっ、(間)聞こえるかい」

亜紀「(鼻をすする)何が？」

女「流水が鳴ってるんだ。ハハハ、こりや珍しい。あんた、すごいよ。めったに聞けるもんじゃないんだよ」

亜紀「流水が…鳴く？」

女「そう、鳴くんだよ」

亜紀「鳴るんじゃないかって？」

女「よそもんはそう思うだろう。だけど、流水は生きてるんだよ。昨日まで何もなかった青い海が、一夜明ければ氷原になっているんだ。こりや、まさに生命の神秘じゃないか。ここで長いこと一人つきりて暮らしていると、流水のいろんな表情が見えたり、いろんな声が聞こえるんだよ」

流水の鳴る音。

亜紀「流水の命の声…これが…」

ギシギシ ゴゴゴ うなり声のような地の底から聞こえる響き、ものきしる音。

家の中で薪をくべる。火のパチパチいう音。

女「でも…、あんたの気持ち、少しは分かるよ」

亜紀「…どうして？」

女「私もねえ、昔、子供を亡くしてるんだよ」

亜紀「えっ、おばあさんも？」

女「まだ6歳だった。かわいい盛りだったよ」

男の子だね」

亜紀「病気だったの？」

女「…戦前、私は樺太に住んでたんだよ。樺太ってわかるかい」

亜紀「ええ、サハリンのことでしょ。昔は日本

本の領土だったのよね」

女「そう、昔は樺太で一旗上げようって男が多くてね。うちの夫も私と息子を連れて渡ったんだ。運良くすぐに、樺太鉄道局に勤めることができたよ。あの頃は幸せだった。だけど、終戦から1週間も経た

ないうちに、いきなりソ連軍が攻めてきたのだ」

亜紀「それで!? 日本人はどうなったの」

女「みんな必死で逃げたよ。大泊から引き揚げ船が出ててね。何万人が棧橋に詰め掛けたことか…」

亜紀「おばあさんたちも、その船に乗ってきただ」

女「ああ、泰東丸っていう船にね。乗ったのは、私と子供だけだよ。夫は鉄道の運転士だったからね。「最後の一人を運ぶまでは、仕事を放棄するわけにはいかない」って言ってさ。ほんと、いい男だったよ」

亜紀「ともかく、おばあさんと子供さんは、

それで無事に帰ってこれたのね」

女「いや、私らの船はね、…沈んだんだよ」

亜紀「沈んだ? どうして!」

女「船が銃撃されたんだ」

亜紀「誰に!」

女「…最初は鯨だと思った。だけど、それは大きな潜水艦だったんだ。甲板にいた私らに向かって銃口を向けたかと思っただん、次の瞬間には、雨のように銃弾が降ってきたのさ」

亜紀「そんな…ひどい」

戸がガタガタ鳴る。

女「あとはもう地獄絵図だ。あんたにはとて

も想像できるまい。周りの人たちは、弾に当たってバタバタと倒れていった。私と息子は、船が傾いて海に投げ出されたんだ。冷たかったよ。いくら夏の海でもね」

亜紀「夏の海でも？」

女「そうさ、あんた、よく冬の海に飛び込もうと思ったもんだね」

亜紀「……それで？ 船に残ったほかの人たちはどうなったの？」

女「室内に入っていた人たちは閉じ込められたままだった。ドアを叩いてたようだけど、皆自分のことに必死で、誰も助けられるわけではないさね。甲板はあっちもこっちも血だらけで、数百人も叫び声がこだましてたよ」

亜紀「そしてそのあと、船が沈んじゃったのね。おばあさんたちはどうなったの？」

女「私は息子を抱えて無我夢中で泳いだよ。船から離れるために。私はたまたま、銃撃される前から救命胴衣をつけていたのさ。そのおかげですつと浮かんでられた。息子をしっかりと抱いて守っていたから、海に落ちた時もケガはしなかった。ただねえ……」

亜紀「だけど？」

女「それからあとがさらに地獄だったのさ」

風の音と流水の音が重低音で鳴り響く。玄関の戸が激しくガタガタ揺れている。

女「私たちは、離れたところから船が沈むのを見てた。船の近くにいた人たちはみんな渦に巻き込まれて一緒に沈んでいったのさ。それをなすすべなく見てるしかなかったんだ」

亜紀「たくさん人が死んだのね……」

女「そうだね。ただ、その時はまだ生き残っている人も大勢いたんだ。だけど、そこで人間の本性つちゆうものを、見ることになっちまったんだよ」

亜紀のゴクリとツバを飲む音。

戸がガタガタ揺れる。

女「救命胴衣を着けていない人たちは浮遊物に掴まってた。力のない人は、次々におぼれていったよ。疲れ果てて、掴まったまま眠った人もいた。もちろんそのうち、手が離れて沈んだけどね。誰もに死にたくなんてなかったさ。あんたとは違ってね」

亜紀「……そうよね」

女「私たちはただ浮かんでることしかできなかった。だけど、そこに年寄りの男がちかづいてきて」

亜紀「近づいてきて？」

女「私の着てた救命胴衣を奪い取ろうとしたのさ！」

風の音。

女「ものすごい力だったよ。私も我を忘れて抵抗した。しばらくもみあつてるうちに、男は力尽きて沈んでいったよ」

亜紀「それじゃあ……」

女「そうさ、私が殺した。男の手を振り払つてね」

亜紀「殺したんじゃない！ 仕方なかったことだわ。みんな、生きたくて必死だったんでしよう。おばあさんのしたことは、立派な正当防衛だわ。自分とお子さんを守るための」

女「だけどね、気づいたら息子がね……、私に掴まっていたはずの息子がいなくなつてたんだよ」

亜紀「まさか……それでお子さんが……」

風と流水の音。

女「私はあの子の名前を叫んで、ものすごい剣幕で捜したよ。だけど、水面は大勢の人たちと、投げ出された荷物でこった返してんだ。息子が溺れるのか、沈んでしまったのかさえもわからなかったよ……」

亜紀「ごめんなさい（泣く）もういい。そんなこと、思い出させてしまつて……」

女「あんたもつらいだろうが、私もつらかった。夫ともそれっきり、会えずじまいだ

しね」

亜紀「(泣きじやくる)」

女「それでも私は自分から死を選ぼうとは思わなかったよ。なんとか助かりたかった。あの冷たい海から這い上がりたかった。わかるかい。死に直面した人間は、誰一人死にたいとは思わないものなんだよ」

亜紀「ごめんなさい、ごめんなさい…」

女「もしかしたら、息子の小さな手を振りほどいたのは、私かもしれない。男を払ったつもりでね。ずっとずっとわからないままなんだよ」

亜紀「おばあさんも私と同じなのね…」

女「そうさ、だから、あんたもその痛みを抱えていかなきゃならない。そうやって、心の中で亡くした子供を供養していくしかないんだよ」

亜紀「生きてかなきゃ、ならないのね…」

女「氷も人の心も流れ着く、それがこの岬だ。あんたもあの流水を見て何かを感じたんなら、もうバカなことは考えないことだね」

亜紀「浅はかだったわ。おばあさんの苦勞に比べたら、私…」

女「そうだ、あんたは幸せにならなきゃならない。子供の分も、私の分も…」

亜紀「おばあさんの…分？」

女「(元気に)さあ、おしゃべりはここまでだ。泣いてばかりで疲れただろう。今夜はここでゆっくり休みな。明日の朝起き

たら、何もかもが変わるさ」

亜紀「ええ、ありがとう。この布団、借りていいの」

女「もちろんだよ。あつたかくするんだよ。

じゃあ、おやすみ」

亜紀「おやすみなさい」

風、流水、戸の揺れる音が、それぞれはげしく大きくなっていく。

朝。風の音が少しおさまっている。肩を叩いている音。漁師の声が聞こえる。

漁師A「おーい、おーい、起きろー！」

漁師B「生きてるか？」

漁師A「息はしてるみてえだな。おい、起きろ！」

亜紀「うーん…」

漁師B「おつ、気がついた！ 大丈夫か」

亜紀「な、なに？」

漁師A「どこもなんともなさそうだな。まったく、なにやってんだ。こんなところに寝て。よく凍死しなかったもんだ」

亜紀「はっ、おばあさんは」

漁師B「おばあさん？」

亜紀「ここ…どこなの？ なんでムシロがかかっているの？ 私、確か海の家にな…」

漁師A「ここは漁師小屋だよ。海の家なんてこんな岬にあるわけねえべや」

亜紀「嘘でしょ、確かに…」

亜紀、戸をガラツと開けて外に飛び出す。風の音、流水が軽いきしむ音がする。

亜紀「だって、屋根に「終点」って看板が

…」

漁師A「「終点」？ 何言ってるんだ、あんた」

亜紀「だから、ここの海の家におばあさんがいたのよ」

漁師B「…ははあ、親父、こりやひよつとして例のアレじゃないか？」

漁師A「アレ？ ああ、思い出した！あのばあさんか。ここに来る人はたまーに会うらしいな。その話は久々に聞いたがね」

亜紀「会ってる？…一体どういうこと？」

漁師B「いや、なに。ユーレイだよ。ばあさんのユーレイ！」

亜紀「嘘！夜通し話をしたのよ。樺太から引き揚げてきたって言ってたわ！」

漁師B「だから、その話をもう何人も聞いてるんだよ。泰東丸に乗ってきて、子供が海で死んだとか言ってなかったか？」

亜紀「…そう聞いたわ」

漁師A「かわいそうになあ、あのばあさん。

まださまよってたんだなあ」

亜紀「まさか…。だって、話しながら笑った

り怒ったりしてたのに…」

漁師B「そりゃ、あんた、幻を見たんだよ。自殺志願者がよく見る幻さ。あのばあさん、この辺で死のうとしてる人間を放つとけないらしいんだ」

巫紀「どうして？」

漁師A「あんたは若いから知らんだろうか、昔は引き上げ船3隻が銃撃されたつちゅうのは、ものすごく大きなニュースだったんだよ」

漁師B「なんでも千人以上が死んだみたいだ。その中でも泰東丸は9割の人が亡くなったつちゅうぞ」

巫紀「そうなの！？ じゃあ、きつと、おばあさんもその時…。子供を捜しながら海で死んでしまったのね…」

漁師A「しかも、その泰東丸が見つかったのはここ20年くらい前の話だ。だから全ての遺体があがったわけじゃない。そのばあさん、ここらへんまで流れてきたのかもしれんなあ」

巫紀「そうだったの…何も知らなかったわ。亡くなった今も、子供のことを悔やみ続けて、浮かばれないでいるのかしら」

漁師B「浮かばれないかどうかはわからんが、でもあんた、運が良かったじゃないか。ばあさんに止められなかったら、流水の下に閉じ込められたりしてたんじゃないか？」

漁師A「そうだぞ、命は粗末にしちやいかん

よ」

巫紀「…そうね、もう大丈夫です。ご迷惑をおかけしました」

漁師B「一人で帰れるか？」

巫紀「はい、心配しないで。しばらく海を見てから帰るから。じゃあ、さよなら」

漁師A「お、おお。もう変な気起こすんじゃないぞー」

岬に立つ。静かな風と海がそよぐ音。

巫紀「おばあさん、ありがとう。夕べのkとお、まだとても信じられないけど、おばあさんに救われたこの命、もう絶対無駄にはしないわ」

それに応えるように流水が鳴く。

巫紀「(ささやくように) さよなら、おばあさん」

積もった新雪の上を歩いていく。

巫紀「さ！ これからどこへ行くこうかしら！」

Σ